森林レンジャーがゆく

森とけものと人と

（30）

実のなる木々の植栽活動

私が愛するタヌキは、家族や仲間で同じフン場（ためフン場）を持ち、フンの臭いで互いの安否などの情報交換をしているといわれています。私はタヌキのフン場を市内の2地点に絞って定点調査をしています。丘陵と奥山の昔道ですが、どちらも半径1キロ（メートル）圏内に人が生活しています。フンを解析すると、私たち人間が旬の食材を味わうように、タヌキもまた旬の食べ物を食べて生きていることが分かります。これは季節ごとに自然の恵みとして得られるものしか食べ物がないことを示しています。

生息環境によって変動はありますが、春はヤマザクラなどの実やカエル、夏はキイチゴなどの実や活発に動き出した昆虫、秋は地面に落ちたカキ、イチョウ、ドングリなど、冬はケンポナシ、リュウノヒゲが目立つようになります。

別の視点でタヌキの食べ物を考えてみると、実をつけるサクラやコナラは、昔、人が薪・炭に利用し、カエルの産卵場所は田んぼや池などの人が作った環境が多く、木の実は人間にも馴染みのある森の恵みで、タヌキは人の生活圏を利用して生きているということが読み取れます。しかし、人が自然と関わらなくなったことで森は利用されずに荒れ、タヌキの食べ物となる生物の生息環境が悪化したために、今、タヌキの暮らしは苦しいことでしょう。

レンジャーとして森を歩いて分かったことは、四季の移ろいが鮮やかだった広葉樹の森は人の手によって針葉樹の森（市域の森の約7割）へと変わり、手入れも利用もされないために、奥山に暮らす多くの野生動物の食べ物となる木の実や昆虫、土壌生物などが得られる多様な環境が減少しているということです。

私が見てきたタヌキのフン場では、フンを求めて集まる昆虫やその昆虫を捕食する昆虫・哺乳類が訪れ、タヌキが実を食べフンとして落とした種子が発芽し、新しい森の命が生まれていました。それは、タヌキから始まる小さな多様性が毎日ひっそりと育まれ「森」がつくられていく証しです。

私たちのどんな暮らしにも、自然とのつながりがあるということを野生動物から学んでみませんか。

（加瀬澤）